

2022年12月11日降臨節第3主日

イザヤ書 35 章 1-10 節

ヤコブの手紙 5 章 7-10 節

マタイによる福音書 11 章 2-11 節

先週金曜日12月9日は、教えている日本聖書神学校でクリスマス礼拝がありました。クリスマス礼拝後も授業はありますが、一足早いお祝いをいたしました。プロテスタント教会の礼拝形式が基本ですが、神学生たちが形式を考えて、音楽豊かな礼拝でした。今年わたしたちの教会でも、昨年よりは少し音楽面で豊かな礼拝をと思っています。わたしたちは、わたしたちのクリスマス礼拝を通して、世界にまことの平和がおとずることを望みたいと思います。

さて、本日の旧約日課も「イザヤ書」です。ただし、「イザヤ書」全体の中で真ん中ぐらいに位置する箇所です。また、「イザヤ書」は、第一（1章から39章）、第二（40から55章）、第三イザヤ（56から66章）と分類されることが多いのですが、本日の箇所は、その内容の区分から、第一と第二のつなぎに位置するともいわれています。

本日の35章を理解するためには、一つ前の34章に触れる必要があります。34章と35章は、内容的にきわめて対照的だからです。34章は、「新共同訳」の小見出しでは、「エドムの審判」とあり、その表現の通り、エドムに対する恐ろしい滅び・破壊の内容が描かれています。

エドムとは、死海より南、そして紅海に至るまでに位置する地域です（現在は西側がイスラエル、東側がヨルダンです）。エドム人がその地に住んで、王国を築いていたのでエドムと呼ばれているのですが、このエドム人がいつ頃この地に住むようになったのかは正確にはわかりません。ただし、紀元前13世紀から紀元前8世紀までは栄え、紀元前6世紀に王国としては滅んだようです。ただし、「創世記」25章40節にある、エサウとヤコブとのやり取りの中で（ヤコブがずるい手段でエサウから長子の特権を奪う箇所、エサウは長子でありながら食欲に負けてそれを渡してしまう箇所です）、「お願いだ、その赤いもの（アドム）、その赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。」とある通り、起源的にはイスラエル（ヤコブ）と親戚関係にあります。

エドム人たちの王国は、新バビロニア帝国が南ユダ王国を滅ぼす頃（紀元前6世紀）には、ユダヤの人々と混在していましたが、南ユダ王国の滅亡と一緒に、王国としては滅ぼされたようです。ただし、残った人々は、南ユダ王国の南に位置に住む続け、「エドム」がギリシア語読みになり「イドマヤ」（イドマヤ人）として、「旧約続編」の「マカバイ記上」の4から5章に登場します。また「マルコによる福音書」でも3章8節にある地名

の一覧に登場します。

そのような背景を持つエドムですが、彼らに対して、34章で非常に厳しい破壊的な裁きの預言が下されています。なぜ、イザヤがそこまで厳しい預言を、エドムに対して語っているのか背景は明確ではありません。ただし、「詩編」第137編7節に「主よ、覚えていてください、エドムの子らを、エルサレムのあの日を、彼らがこう言ったのを『裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで』」とあり、エドムが南ユダ王国にしたと思われる事柄（への恨み）が暗示されています。また「オバデヤ書」は、エドムの傲慢と滅亡について語っていますので、おそらく、新バビロニア帝国が南ユダ帝国を滅ぼした際に、ユダヤ人やエルサレムに対する敵対行為があったのでしょう。いずれにしても、このようなエドムに対する厳しい滅亡の預言の後に、本日の箇所35章が続き、そこで語られている事柄は、小見出しで「栄光の回復」とある通り、1節から最後の10節に至るまで、希望と喜びに満ちた言葉が続いています。それは「**荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ、砂漠よ、喜び、花を咲かせよ、野ばらの花を一面に咲かせよ。花を咲かせ、大いに喜んで、声をあげよ**」（イザヤ35:1-）から始まります。

「花を咲かせる」とある通り、その現象が、時代や文化を超えて、喜びのしるしであることがわかります。そして、ここでは「野ばら」がそのしるしとなっています。ただし、「野ばら」と訳されている言葉は、正確にどのような花であるかは不明で、少なくともわたしたちの教会に咲いている「ばら」とは違うようです。新しい「聖書協会共同訳」では「別訳」として「チューリップ」となっています。

また2節後半には「**人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。**」とあります。「主」と「我らの神」は同一ですが、ここでは「栄光」が「輝き」と並んでおりますので、ここでは一般的に日本語で用いる「栄光」という言葉の意味、すなわち「輝かしいほまれ。光栄。」を意味しています。また4節には「**雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる**」と続き、主なる神様が、悪に報い救われるので、イスラエルは勇気を出しなさいと宣言されます。この節全体が神様任せというような感じもあります。しかし、これら表現は、人間が人間の思いで、人間のための勝利と救いを実現するのではなく、主なる神様が求める勝利と救いを願うことの大切さを示しています。

そして、「**そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う**」という言葉が続き、これは歴史的出来事、あるいはこの地上的出来事を題材としていますが、先週、先々週と見てきました通り、エデンの園の回復のような、本当の平和の状態を指示しています。この箇所は、新バビロニア帝国による南ユダ王国の滅亡と、そこからの回復という事柄を前提しているのですが、単に王国の復興だけを意味しているわけではありません。

ません。それが一つのしるしとなって、主なる神様の意図の回復、すなわち全世界の回復のような、大規模な事柄が起こることを暗示しています。そして、そうであるがゆえに、本日の福音書で、投獄されている洗礼者ヨハネへ伝える言葉として、イエス様が語ったのです。

もちろん、預言者イザヤは、歴史的出来事を通して預言を語っていますので、10節には「主に贖われた人々は帰って来る。とこしえの喜びを先頭に立てて、喜び歌いつつシオンに帰り着く。喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る」とここでの言葉を終えています。この「主に贖われた人々」の「贖う」は『聖書（旧約）』の各所で、ことに祭儀的な意味でも用いられる、「弁償する、償う」という意味ですが、ここでは「主なる神様」自らがそうなさった人々となっています。それがどのような人々であるか、すでに「イザヤ書」10章、11章にある「残りの者」と同じであるのか、ここは意見が分かれるところですが、「イザヤ書」の中の意味としては、共通する部分はあると思います。ただし、ここではその意味が、南ユダ王国の滅亡を生き残った、その王国の「残りの者」という事柄を超えて、広く主なる神様に立ち返るものという意味だと思えます。そして、そのような人々が「贖われた人々」とされるのです。それは、「イザヤ書」の記述から数百年後の、イエス様の時代においてもそのような意味を持つのであり、イエス様から見たら、はるか未来に位置するわたしたちも「贖われた人々」にほかなりません。そして、わたしたち時代を超えて、未来に主なる神様に立ち返る人々も同じです。その意味では、「イザヤ書」の著者の本来の意図を超えるかもしれませんが、主なる神様から預かった言葉であるがゆえに、そのようになるのかもしれませんが、今日にも、そしてこれからの未来にも、主に立ち返る人々が「贖われた人々」となる希望が、この言葉にはあるのです。

さて、本日の福音書もバプテスマのヨハネの物語です。バプテスマのヨハネは、四つの福音書すべてに登場しますが、その描き方はそれぞれ異なっています。共通していることは、イエス・キリスト様の登場のために、備えをする役割を担ったということです。そのため、アドベントのこの季節、バプテスマのヨハネの姿から、クリスマスに向けての備えをするようにと聖書に日課が定められているといえます。

本日の物語では、バプテスマのヨハネが、ヘロデによって投獄された獄中から、弟子を遣わして、イエス様に「**来たるべき方は、あなたでしょうか？それとも、ほかの方を待たねばならないでしょうか**」（マタイ 11:3）と尋ねます。この物語のヨハネは、自分を来たるべき方のために道を備える存在と定めています。しかし、それが誰であるかがはっきりしないまま、彼は投獄されてしまったのです。彼の命はヘロデ王の命令ひとつにかかっています。事実、宴会の余興として彼は処刑されてしまうのです。彼は、主なる神様のために、この世界にその神様の正義を宣べ伝えるために、そして、本当の救い主の登場のために道を備え続けてきたのですが、今、自

分が行ってきた行為の結果が、何であったのかがはっきりしないまま、死を迎えようとしていたのです。

そのようなバプテスマのヨハネの質問に対して、イエス様は明確には答えていません。「わたしが、期待されている者です」とは答えません。そのかわり、イエス様が今行っていることを、『聖書（旧約）』の言葉を語ることを通して答えています。すなわち、本日の旧約日課である「イザヤ書」35章の言葉を中心にして語り、答えています。なんとも、あいまいな答えとってしまいます。また、それに対するヨハネの反応は描かれていません。しかし、バプテスマのヨハネはそれで納得したのだと思います。なぜならば、彼自身がそのような主なる神様の正義のために命をかけて運動を始めたものの、『聖書（旧約）』の預言者の言葉を通じて主なる神様が示された意志を感じたからです。

通常ならば、人間は、自分の行為に対する人間的な達成感を求めます。あるいは、自分の納得するような形で何かを達成した人の報告で満足します。しかし、バプテスマのヨハネは、彼自身の人間的な思いを超えて、主なる神様に何を求めているかを望み、それがどのように具体化するのかを求めていました。人間の正義ではなく、主なる神様の正義の実行を求めていたからです。それゆえに、イエス様の働きを通して、世界に何を望んでおられるかを感じ取り、またその実現を悟って、未来に希望を持ったのだと思います。

イエス様は、その後、群衆たちにバプテスマのヨハネについて教えます。おそらく「出エジプト記（23：20）」からの引用である言葉を用い、彼が道を準備する使者であったこと、そして歴代の揚言者の中ももっとも偉大であること、しかし、天国では最も小さいものであることと説明します。少し厳しすぎる評価かもしれません。しかし、イエス様が明らかにしたことは、バプテスマのヨハネは、最大限に素晴らしいが人間であるが、そのような人間であっても、人間に過ぎないということです。イエス様は、徹底して主なる神様の視点から語っているからです。すなわち、神の子として語っているからです。

この物語から学ぶことはただ一つ、わたしたち一人ひとりにとって、またわたしたちの世界にとって、平和、救い、平等、正義、いろいろな人間的な言葉で表現されますが、本当の良いものはイエス様を通して示され、実現するということです。イエス様の出来事とは、過去におきた歴史的の事実であり、また、現在がどのようなであっても、変わらない未来に向けた希望です。だからこそ、バプテスマのヨハネの姿にある通り、たとえ自分の志半ばで死を迎えるようなことになったとしても、その希望を確認できれば十分なのです。あるいは、悲しい状況の中にあっても、その希望があれば、絶望はないのです。毎年クリスマスは訪れます、そこにあるさまざまな喜びとともに、本当の希望がこの世界に誕生したこと、その喜びを改めて味わいたいと思います。